

「底が突き抜けた」時代の歩き方 529

「象徴的貧困」化状況における「中抜き」の加速化

情報やイメージ、映像が多様化しているように見える現代社会であるのに、受け手である《人々の関心や話題がひとつの極に向かっていく奇妙な現象がみられる。どのメディアでも同じ人物がもてはやされ、時には嵐のようなバッシングを浴びる。社会全体の空気も特定の方向に傾きがちだ》として、06. 2. 14付朝日夕刊は「象徴的貧困」という言葉で、そのような傾向を捉える記事（編集委員・清水克雄）を組んでいる。

《「象徴的貧困」とは、過剰な情報やイメージを消化しきれない人間が、貧しい判断力や想像力しか手にできなくなった状態をさす》と説明され、「象徴的貧困」がどういう事態を招くかは、東大教授の石田英敬によれば、「メディアの多様化と逆に、人間の精神面では画一化が進むことになる。

フランスの哲学者ベルナール・スティグレールが使用した言葉を石田氏が訳語したもので、「メディアがつくりだす気分になんか動かせない日本が現実のこそふさわしい」と考えたという。「情報社会の中で増え続ける大量の情報に追いつくためには、情報の選択や判断までを自分以外の誰かの手にゆだねざるをえなくなっている」ので、「結果として、政治や社会などの重要な問題についても、誰もが同じような感想や意見しかもてなくなっている」。昨年12月末、東大で「象徴的貧困」を含むテーマで開かれた国際シンポジウムに参加したスティグレールは、「現代の大きな危機は、象徴的貧困が進んだために、自分と他の人間を区別する境界があいまいになり、「その結果、自分が確かに存在しているという感覚が失われ、自分を本当に愛することもできなくなっている。そうした人間の危機がさまざまな社会問題や事件も引き起こしている」と、インタビューに答えて語った。

「象徴的貧困」化のなかでは、自分が自分であることの根底が大きく揺らいでいるために、存在感覚が失われて浮遊状態に置かれ、自己不在の社会問題や事件が引き起こされていくということであろう。特に《幼い時から大量の人工的なイメージに囲まれた子供たち》の場合、「文化産業によって人間の意識や精神までがコントロールされる。こんな時代は歴史上なかった」と言うスティグレールは、《どのメディアも同じ数量化された商業主義的な枠組みで情報を扱っている》以上、「メディアの多様化と言われているのは、実は偽りの多様化にすぎない」、だから、メディアの「偽りの多様化」のなかで人々の意識は否応なしに同じ方向に向かわざるをえないと説明する。彼が《個人が情報を発信できるインターネット》に期待を寄せるのは、それが《商業主義的な枠組み》を逸脱しているからだ。「情報のつくり手と受け手が同じ立場に立つ自由な共同体が生ま

れる可能性がある」ということらしい。

しかし、本当にインターネットは《象徴的貧困からの出口》になるのだろうか。東大助教授の北田暁大は、「インターネットによって新しい形の象徴的貧困化が進んでいる」と指摘し、「ネット空間には趣味や関心による共同体が生まれている。そうした同質的な空間の中では同じような情報だけに接してすませることができる」ために、「自分たちと違う価値観や異質な見方と向き合う必要がない。ある意味では、マスメディアの時代よりコミュニケーションは貧しくなっている」と言う。「象徴的貧困」が加速するなかで育ってきた個人が、インターネットによって情報を発信できる「自由」というものが「象徴的貧困」からの自由ではありえない以上、「インターネットによって新しい形の象徴的貧困が進むことになるのは、必然といえよう。

「象徴的貧困」化が突きつけている課題は、《過剰な情報やイメージを消化しきれない人間が、貧しい判断力や想像力しか手にできなくなっ》て、「誰もが同じような感想や意見しかもてなくな」るなかで、万人が「消化によい快楽」としての情報を求めるようになることだ。逆にいえば、「消化によい快楽」としての情報を万人が求めることにおいて、偽りの「メディアの多様化」のなかで人間の精神面での画一化が進んでいく。

《さらに問題なのは、一人一人の個人に合う情報を前もって選択してくれる新しい技術の進化だという。たとえば特定の趣味や傾向をもつ人には、ネットの接触履歴などを機械が自動的に読み取り、同じようなサイトや本の情報だけを選んでくれる。

「いつも自分にとって快適な情報だけに囲まれていることになる。情報は多様化していても、実際に個人が手にする情報は多様だとは言えなくなっている」》

「象徴的貧困」という言葉でいいあらわされようとする人間にとっての真の危機は、自己の欲求を肥大化させることで、「生きることの意味」が限定され、狭められていくところにあるにちがいない。個々人の満足感や充足感が徒手空拳の手探りのなかで希求され、一つ一つ確認されていくのではなく、その自己確認の作業を通じてつくり上げられていくのではなく、自分の外から予めセットされた満足感や充足感が与えられていくような仕組みになってしまっていることだ。いうまでもなく人と人との関係のなかでは個々人の満足感や充足感というものは、たえず変化に晒される。相手との関係のなかで満足感や充足感を願うようになるからだ。相手にも受け入れられ、共有されないような自分の満足感や充足感は成り立たなくなる。つまり、自分にとっての満足感や充足感自分だけの世界のなかの自己慰撫であって、自分が自分の外に出て求めようとする満足感や充足感とは別次元に属することに気づかなくてはならない。

「象徴的貧困」化状況の下では、人と人は出会う必要がなくなっているし、人は人に出会う欲求すらなくなっているのかもしれない。自分以外の人間は自分だけの満足感や充足感を肥大させていく上で、厄介なだけの障害物とみなされることになるのかもしれない。自分と異なる相手との関係に立って、双方が納得できる満足感や充足感をどう構築するか、といったことなどは、徒労に終わる危惧のある気苦勞の多い無駄なこととして、

当初から断念されていくのかもしれない。そうであるなら、自分の満足感や充足感をなんの障害に出会うこともなく、スムーズに肥大させる関係や仲間が求められていくことになる。インターネットは実質な関係に出会うツールとしてよりも、「同質的な空間」を拡大させるツールとして活用されていくのは目にみえている。異質な相手と直接向き合うことのしんどさよりも、異質な相手とネット上で言葉を交わし合うことのほうが軽いとはけっしていけないのである。

「象徴的貧困」化の問題をライブドア事件に即して考えると、「ライブドアを決して肯定できないけれど、ライブドアが壊そうとしたものは、もっと肯定できない」（佐藤俊樹）とはとてもいえそうにない。なぜなら、多様性の度合いでいえば、ライブドアよりも「ライブドアが壊そうとしたもの」のほうが広く、「稼ぐが勝ち」の価値観でかたちづけられている同質的な空間に覆われたライブドアのほうが、「象徴的貧困」を際立たせているからだ。それは、ワイドショーで盛んに流されたライブドアの忘年会風景の映像にも見て取れる。

《立派なステージの上に、なぜかガテン系ファッションの堀江元社長や幹部たちが並び立っていて、彼らや客席の社員たちが「ミ～ヤウチッ、ミ～ヤウチッ」と手拍子ではやし立てると、ライブドアきっての実力者という宮内亮治（元取締役）が上半身ハダカになり、踊り狂い、周囲は大喜びしている》と『サンデー毎日』連載エッセイ（2. 12）で描写している中野翠は、《ださーっ、泥くさーっ。完全に私の偏った好みにすぎないわけだが、私、こういうタイプの「もりあがり」がイヤでイヤで。「ヒルズ族」だか何だか知らないが、昔ながらの根性一番の会社の宴会とちっとも変わるところがないじゃないの。沖縄の「荒れる成人式」もチラリと連想。全然クールじゃない。暑苦しい》と感想を述べているが、この忘年会風景はライブドアがいかに「象徴的貧困」に覆われているか、を物語っているのである。大学の同好会のような仲間意識で会社が運営されており、「稼ぐが勝ち」の価値観に貫かれた共同体が宴会をすれば、バカ騒ぎの同質的な空間としてしかあらわれようがないお粗末さがそこに浮き彫りにされていたのだ。

「象徴的貧困」化を一義的な価値観で統一されていく同質性の拡大、異質性の排除という要素でみていくなら、働くことを金を稼ぐことに直結させ、どれだけ多く金を稼いだかに働くことの意味を見出そうとするライブドアは、紛れもなく「象徴的貧困」を加速させているだろう。福田和也は『『闘う時評』拡大版』（『週刊新潮』2. 9）で、「稼ぐが勝ち」以外のことについて考えなかったホリエモンに対比させるようにして、松下幸之助の経営理念を次のように持ちだしている。実家が離散したため小学校も3年程しか行けず、《かなり後年まで、字も満足に読めなかった》松下は、《だからこそ徹底的に考えた》という。

《昭和7年、ナショナル・ランプの成功で、業界の一角を占め始めた頃のことです。取引先が熱心な天理教教徒で、誘いに抗しきれず、天理の本部を見に行った。当時、天理では本堂を新築していたのですが、それを見て、松下は驚き、考えるのですね。何に驚

いたかという、本堂建設のため、全国から集まって、奉仕している信徒の人たちが、喜びに溢れ、嬉々として働いている。自分の工場では、給料を払っているのに、誰もこんな表情を見せない。ただで働くのが嬉しくて、なぜ給料を貰っている者が沈んでいるのか、と。

普通だったら、信仰心があるからだ、とすましてしまうのですが、松下は徹底的に考えるわけですね。どうすれば、自分の工場でも、同じように、よろこびをもって働いて貰えるだろうか、と。そこで、松下幸之助は、企業にも使命が必要だと思いたるわけですね。ただ儲けるだけではない、むしろその使命のために働く、そのことが大事なのだと。水道の水のように、ただに近い値段で、大量の電化製品を供給することで、世界を貧困から救うという水道哲学はここから生まれたわけです。》

福田和也が松下幸之助を取り出したのは、単に堀江貴文と対比させるためだけではない。ホリエモンは失墜しても、彼が作ったライブドアのような会社が跋扈する「象徴的貧困」化の土壤にどう立ち向かえばよいのか、出口をどのように見出せばよいのか、を立ち止まって真剣に考えざるをえなくなるところで、松下が呼び戻されているにちがいない。

《松下の理念は古く見えるかもしれない。けれども、働くのは金のためではなく、使命に尽くすためだということを、能書きとしてでなく自力でつかみ出したことには凄みがある》と言うとき、《徹底的に考えた》挙句、《自力でつかみ出した》点を強調することで、「稼ぐが勝ち」という古くさい価値観に走った考えないホリエモンを他方に浮かび上がらせながら、我々が直面している現在の状況の困難さを打開するためには、松下がやったように《徹底的に考え》て《自力でつかみ出し》てくる以外に術はないことを主張しているようにみえるとしても、「象徴的貧困」化の視点でみるなら、松下幸之助の理念は古臭いどころか、多くの示唆を今日に与えるように思われる。

松下幸之助が画期的だったのは、人は金を稼ぐためにだけ働くのではないという理念を、金を稼ぐために誰もが働いている工場のなかに持ち込んだ点にある。その理念を掲げることによって労働意欲が高まり、会社の利益も向上することを計算したからではない。金のために働くという考えが支配的な労働現場のなかに、「働く喜び」という余分な考えを持ち込んだことが画期的であったのだ。いいかえると、働くことは仕方なく給料を稼ぐために労働力を売っている奴隷労働にほかならないという考えが支配的な同質的な空間のなかに、働くことには貧困からの脱出という使命があるという異質な考えを挟むことによって、働くことの考えかたの多様化を促したのだ。松下幸之助は、人間というものはイヤな労働から解放されたときだけ生き活きするのではなく、イヤな労働のなかでも生き活きしなければならなくなるように考えつづけたのだ。

働くことのすべてをお金に換算しようとするホリエモンの「稼ぐが勝ち」的考えかたは、松下が憂えたお金のために働くという考えかたの同一線上にある古臭い考えであることは間違いない。昔はわずかなお金のために働かされてきたが、今は才覚しだいでいくらでも稼げるようになったということであり、稼げるお金の量を比較しなければ、お

金のために働くという考えかたは一貫しているからだ。働くことがお金に換算されるようになれば、より多くのお金が得られることが目的となって、そこに「稼ぐが勝ち」の発想が生みだされてくることになるが、この考えかたが問題なのは橋本治も指摘していたように、働くことの喜びは働くことの中ではなく、働くことが終わってお金に換算されることの中に見出されるようになることだ。お金を貰うことで働くことを我慢するという考えにいつしか馴染んでしまう。

働くことはお金を貰うための仕方のない通過点という考えは、働かずにもしお金を手に入れることができるなら、働くことはする必要のない無用のこととして斥けられてしまう。働くことはお金を得るためのプロセスではあっても、働くことのプロセスを持たないということになる。松下幸之助が働くことはお金を得るための手段だけではない、働くこと自体に使命があると主張したとき、松下は働くこと自体にプロセスがあることを発明したといえるかもしれない。働くこと自体に喜びがなければ、それこそ真の貧困ではないかと、彼が考えたかどうかはわからない。だが、《水道の水のように、ただに近い値段で、大量の電化製品を供給することで、世界を貧困から救うという水道哲学》を生み出したとき、その水道哲学の根底に働くこと自体の貧困からの脱出という課題が据えられていたとしてもけっして不思議ではない。

働くことには使命があるという考えは、働くこと自体に意味があるが故に、働くことをお金入手のために省略してはならない、ということである。たとえ働くこと以外の別のかたちでお金を稼ぐことができたとしても、働くことには働くことの意味があり、それは他をもって代えることはできないということである。要するに、お金を稼ぐためには働かなくてはならないとしても、働くことにはお金に換算されない大きな領域が見出されるのだ。働くことをお金に換算するというかたちでけっして貶めてはならない、ということ松下幸之助は言おうとしていたのかもしれない。松下と対極にあるホリエモンの金銭哲学では、働くことはあくまでもお金を稼ぐための手段にすぎないから、^{じゅう}従としての働くことはお金を稼ぐことのなかで省略され、「中抜き」されてしまうことも起こってくる。

脳科学者の茂木健一郎が時評コラム（『中央公論』06．2）で、《学問の世界で大学が「中抜き」されかねない》風潮が身近に迫っていることについて書き留めている。

《先日、母校の大学祭で開かれたシンポジウムに呼ばれて、脳の話をした。私の後に、ベンチャー企業の経営者がパネル・ディスカッションをした。自信に溢れ、会場の学生たちも話に惹きつけられていた。何十億、何百億円という話は景気が良い。時を得た勢いがある。

終了後、レストランを借り切って懇親会があった。その時の起業家たちの発言に私はすっかり考え込まれてしまった。大学なんか出たって、仕方がない。とっとと辞めてしまって会社を始めたほうが良い。ビル・ゲイツも、スティーヴ・ジョブズも、ホリエモンも皆中退したじゃないか。君たちもそうしなさい、と言うのである。

暴論のようだが、現代を象徴する光景を目撃したように思った。大学なんて要らないとベンチャー企業の経営者に宣告された時に、アカデミズム側のほうから有効な反論ができない。そんな時代の雰囲気は確かにあると感じられたのである。》

「大学なんて要らない」という宣告に対して、茂木氏は《現代における大学の存在意義とは何か？》と真面目に応答しようとする。大学に所属しなくても、《インターネット上の学術論文に誰でも接することができる》し、《意欲がある人ならば、最先端の素粒子理論から中世の文学史まで、何でも探究できる。》コミュニケーション面でも、《少数で親しく交わり、研究活動を行う大学院》とは異なって、《教室の中に多数の学生を集め、そこで学問を伝授するというスタイル》の学部教育は、《インターネットを通じた大学教育の可能性が現実味を増す現在》、時代にマッチしなくなっている。《大学が、企業への就職予備校や職業訓練の場と化してしまうのではなく、アカデミズムの府としての輝きを保つためには、現代における学問とは何なのかということを実際に考えるしかない》というところに活路を見出して考えようとする。

学問する場というその一点において、大学は存在意義を有するのであれば、今の大学で学問の魅力というものがどれほど輝いているかが問われることになるだろう。いうまでもなく学部教育においては学問の魅力という言葉自体が死語と化しているだろうから、《今、大学に求められていることは、閉鎖的な人的構成を含め、自らのあり方を根底から見つめ直すことだろう》と、言っても言わなくても同じような言葉で締め括られるとしても、こちらの関心は「大学なんて要らない」という宣告の彼の受けとめではなく、そう宣告するベンチャー企業の経営者にもともと向かっているので別に構わない。金を儲けるためには、《大学なんか出たって、仕方がない。とっとと辞めてしまっただけで会社を始めたほうが良い》という発言は、サラリーマンを続けても貧乏なだけだから、お金持ちになるためには起業しなさいと説教するホリエモンと同じ文脈にあるのを、「大学なんて要らない」と聞くとところに茂木氏の飛躍があった。彼らは大学なんてどうでもよいとは思っていても、「大学なんて要らない」というところにはたぶん踏み入るつもりはないだろう。

ホリエモン的な発言の真意は、おそらくこうだ。金儲けに大学へ行くことが役立つなら、大学へ行けばいいが、役立たなければ《大学なんか出たって、仕方がない。》今の大学は金儲けに役立たないから、《とっとと辞めてしまっただけで会社を始めたほうが良い》ということだ。彼らのいう「大学」は大学に限定されていないと考えたほうがよい。金儲けに役立たないなら、高校なんか出たって、仕方がないと言いだしかねない勢いを持っているからだ。そこに一貫しているのは、やはり「稼ぐが勝ち」の考えである。お金持ちになりたければ、稼ぐことに全神経を集中せよ、そのためには余分なことはすべて省略せよ、という発想なのだ。その発想の根源には、働くこととお金を稼ぐことがイコール視され、お金を稼ぐためにはイヤな働くことも我慢しなくてはならないという考えがある。

だが、この発想には我々はすでにどこかで出会ってきている。「援助交際」である。

お金を貰うために、オヤジに何かをされるというイヤなことを帳消しにするという発想である。給料を稼ぐことによって、働くというイヤなことを帳消しにするという考えかたは、「援助交際」的発想とどこがどう異なるのだろう。「援助交際」も働くことも、イヤなことを空白にして耐えようとする「中抜き」の感覚を人々にもたらすことによって、精神的な荒廃を招くのは必至である。援交少女に「終わりなき日常」を生きる軽やかさを見出していた宮台真司は、後に彼女たちの多くが精神疾患に陥っている現状を見て、「見込み違いだった」と述べたが、宮台真司や彼女たちの測り知れないところで援交は彼女たちに少なからぬ打撃を与えていたのだ。お金を稼ぐことの快感よりも見知らぬオヤジに身体をもてあそばされることの不快感のほうが上回り、自分の身体が自分のものではなくなってしまうという体験をしいられたことが、彼女たちに裂傷を負わせたと考えられる。「援助交際」によって彼女たちは言葉の本当の意味で、自分の身体を奪われる経験に直面することになったかもしれないが、働くことがお金を稼ぐことになってしまったとき、そこで奪われることになるのは働くことである。働くことを奪われてお金だけがたくさん稼げることもたらす精神的な荒廃については、作家の藤原智美が時評コラム（『中央公論』06．3）で次のように言及している。

宝くじ売り場に行列している人々が《夢見ていたのは3億円という札束だった。その同じ額を1日にして失った若者がいる。ライブドア騒動で東証が全銘柄の売買を停止したその日、彼もまた株式投資で大きな損失をだした大勢のなかのひとりだった。

その27歳の投資家は、氏名は不明で顔もわからないのだが、いまや大変な「有名」人となった。元手の160万円を、5年間で100億円にした株長者として知られている。みずほ証券の誤発注で20億円あまりを稼ぎだし、一躍、時の人となったのだ。そんな大金持ちにもかかわらず、彼のことを無職の青年とよぶマスコミも少なくない。100億円を動かすのだから、りっぱな投資家のひとりである。けれど社会は、彼のことを一人前の職業人としてではなく、中途半端なネオニートとして規定したいらしい。

それはフェラーリに乗るわけでもなく、アイドルタレントと豪遊するわけでもなく、服はスーパーで揃え、クレジットカードもないという、その「引きこもり」的な空気を漂わせる彼のライフスタイルと、無関係ではないだろう。ある週刊誌は彼のこんな発言を紹介している。「3年前から株取引を面白いとは思わなくなった。じゃあ、やめて何をするのかと考えてみても、思いつかない」。

この種のセリフをどこかで聞いたことがあった。ぼくは2003年のクリスマスイブに起こったある出来事を思いだした。当時26歳の青年が、名古屋テレビ塔から大量の札束をばらまいたのだ。1ドル札が約9300枚、旧百円札が100枚、イブの空に舞った。

当時の報道によると、この青年は「若くしてカネを持つと目的意識がなくなってつまらない」と語っていた。彼もまた株投資家で、経営破綻した足利銀行株を売買して短期間で7～8000万円を稼いでいた。けれど彼の肩書きは投資家ではなく、元大手銀行

員でしかなかった。

彼もそして１００億円の資産をもつあの青年も、パソコンのキーボード上で大金をひねりだし、そしてそのカネを消費へまわす意欲を欠いているところが共通している。》

前者の《１００億円の資産をもつあの青年》については、週刊誌には次のようなことも書かれていた。もう１００億円も儲かったのだから、すぐにやめればよいと思うだろうが、パソコンのキーボードを叩くだけで何千万、何億円も儲かることを考えれば、やめたくてもやめられない。株取引に集中することが辛くても自分からはやめることができないので、本当にやめられるときは大暴落でスッテンテンになったときだ、と。株取引の辛さについてはこうも言っていた。寝ている間もニューヨーク株式の動きが気になっているし、息抜きに散歩に出ても、株の動きが頭から離れないのですぐに家に帰ってくると、得意顔の一片も見られず疲れきった表情で答えたという。その記事を目にして浮かんできたのは、生きていることの楽しさとは全く無縁の、地獄のような暮らしという感想に尽きる。

我々の生活はお金のことを考える時間と、お金のことなど全く考えない時間のバランスの上に成り立っている筈なのに、来る日も来る日も一秒一刻、キーボードに直結しているお金の動きばかりを見詰めて、座敷牢のような暗い部屋で寝る間も惜しんで息をひそめて暮らさねばならないとすれば、自らが望んだこととはいえ、それは拷問に等しいだろう。株取引を「やめて何をするのかと考えてみても、思いつかない」という発言は、株取引以外のすべてを奪われてしまったという告白にほかならない。ここで、`なにかを得ることはなにかを失うことである、といった言葉が浮かんでくる。彼は株取引を覚えたことによって、株取引以外のあらゆることを覚えるのを逸したのである。株取引を通じて必死に額面上の１００億円をかせぐことに集中しなければ、他のなにかに集中して驚嘆みできた可能性に出会えたかもしれないのだ。

「金で買えないものはない」という考えは、自分自身もまた「金で買える」存在であることを前提にしなければ成り立たない。自分自身が「金で買える」存在になるためには、「金で買えない」自分自身を自分の中で消滅させるか、それとも表面に浮かび上がってこないように心の奥深くに沈めて固く蓋をしなくてはならない。つまり、「金で買える」自分は「金で買えない」自分を殺さなくてはならない。人間にそんなことが耐えられるだろうか。耐えられないと思う。耐えられなさはさまざまな不安のかたちをとって、本人を苦しめるにちがいない。小倉千加子は『週刊朝日』の連載コラム（２、１０）で、「^{うな}呻されるホリエモン」をテレビ画面からいくつか拾い出している。

《ホリエモン逮捕で、ＴＶが「特番」に切り替わった。

強制捜査の後、記者会見で額に汗を浮かべてホリエモンは「悪夢を見るんです。何かに追いかけられている夢を」と語っている。

自分が「堀江貴文容疑者」になることを、もっとずっと前から本人は予感していたのではないかと思う。

「危ないから近寄ってはいけない」と親に言われると、余計に危険物に近づいていきながら幼児のようなものである。別に「容疑者」になりたいと思ってなったわけではない。が、自分の中に「転落」してしまう危険な何かがあることを無意識で知っていて、しかも自分ではそれが手なずけられなかったのだと思う。

楽天の三木谷浩史氏やソフトバンクの孫正義氏とは違い、ホリエモンには、常に鬱勃たる怒りや自分の人生をギャンブルにしてしまう性癖、露悪者的態度、そして意外なほどの正直さがあった。株主総会で泣く社長というのも弱すぎる。

NHKの「日本の、これから」に出演した際、フリーターたちに、会社が悪いのではなく君たちが悪いのだと主張したあとこう言った。「僕だって明日どうなるか分からない……」

三木谷氏なら口にしないであろう言葉である。

高校の先輩にあたる孫正義氏とも、ホリエモンは対照的な生き方を選んだ。

孫氏は自宅に広大な敷地を求め、ホリエモンはあくまで高さを求めた。》

《ホリエモンは高校時代、庭に人間が立って埋まるほど深い穴を夢中で掘っていたと、父親がワイドショーで語っていた。

穴とは通常「墓穴」であり、穴を掘るのは自分が穴に入る（死ぬ）ことの恐怖を自分に確認させる行為ではなかったかと思う。

穴に入るのは自分ではなくあいつだ。そう思えば恐怖を忘れられる。そのためにライバルを「葬り去る」ことに生きた経営者は昔から大勢いる。ダイエー中内功氏もそうだった。

依存症になるかならないかの違いだけである。》

以上のいくつかの「呻されるホリエモン」から明白なのは、彼は「稼ぐが勝ち」へと突き進む自分の歩みをけっして肯定してはいなかったことである。小倉千加子もその点について、《自分の中に「転落」してしまう危険な何かがあることを無意識で知っていて、しかも自分ではそれが手なずけられなかったのだと思う》と指摘している。楽天の三木谷浩史やソフトバンクの孫正義などが、おそらく自分の歩みに対して些かも否定的な感覚を持ち合わせていなかっただろう、その点が彼らとホリエモンとでは決定的に異なっていたと感じられる。「稼ぐが勝ち」とか「金で買えないものはない」などと、彼らがけっして口にはしないセリフをホリエモンが吐くのは、彼らがそう思っているにもかかわらず口にはしないだろう偽善を、あるいはそう思っていないくてもやっていることの「稼ぐが勝ち」そのものである彼らの欺瞞ぶりを突くために、敢えて挑発するように口にしてみせている様子が漂っているのだ。

ホリエモンにみられる肯定感のなさ、先の100億円の青年が呟く肯定感のなさ、と重なっている。彼が「株取引を面白いとは思わなくなっ」ているのに、株取引以外の面白さがわからないから仕方なく株取引を続けているということは、自分のやっていることに肯定感を持てなくなっているけれども、だからといってその肯定感のなさから脱出することもできない状態にあるということだ。ホリエモンもまた、「稼ぐが勝ち」に肯

定感を抱けなくても、それにむかって歩みつづけるしかないというふうに見える。自分のやっていることに肯定感が持てなければ、肯定感が持てる別の歩みを見つければよいということだが、けっしてそうはならない。肯定できなくても、「稼ぐが勝ち」の中に引きこもるし、株取引の中に引きこもるのである。なぜか。世界は肯定できるようにはなっていないと考えられているからだ。ホリエモンが「富豪のニート」に見えるのも、100億円の青年が「引きこもり」に感じられるのも、彼らが世界は肯定できるようにはなっていないと考え、そんなスタイルを身にまとっているからである。

ホリエモンは稼ぐことには常人以上の意欲を持っているが、稼ぐこと以外の結婚生活や一文にもならない趣味、道楽に対しては常人並みの意欲すら持っていないように見える。100億円の青年も同様だ。彼は株取引には尋常とはいえない意欲を突出させているが、株取引以外のことへの意欲は埋もれてしまっている。少なくとも彼らは人生すべてに対して意欲的ではない。金儲けという一点でのみ、意欲的であるにすぎない。資本主義社会では、お金をたくさん保有することは人生で一定以上の重要さを占めるとしても、したがって、金儲けはかなり有意義とみなされるとしても、やはり金は金にすぎず、金の多寡が人生の価値を左右するわけではないし、金儲けへの意欲がそれ以外の他への意欲に勝る価値を持つわけではないことははっきりしている。

『下流社会』の三浦展によれば、「下流」とは単に所得が低いだけではなく、コミュニケーション能力や生活能力はもちろん、働く意欲や学習意欲、消費意欲そのものが低い、要するに、三浦展いうところの人生への意欲が総じて低い人々を指していた。では「下流」ではない上流とは人生への意欲が総じて高い人々を指すことになるだろうが、ホリエモンや100億円の青年などはけっして「下流」ではないものの、だからといって総じて人生への意欲が高くはない。上流と下流の区分について、漠然とした人生への意欲を取りだして、その意欲の高低を評価すること自体に問題が潜んでいるにちがいない。

「下流社会」の出現に言及した通信第516号の末尾で、野村総研の05年12月5日発表の「仕事に対するモチベーション（やる気）に関する調査」で、上場企業の若手社員の4分の3が「現在の仕事に無気力を感じ」、仕事に社会的な意義を見出せないために成長の実感もないことを取り上げたように、いうまでもなく彼らは「下流」の住人ではないが、仕事への意欲が低い点では紛れもなく「下流」の気分満ちている。少なくとも『下流社会』における上流一下流の図式はうまく当てはまりそうにない。下流に限らず上流においても、人生に対する人々の意欲が低下していることは否めない。「象徴的貧困」の加速化を抜きにしては、この問題は語ることができない筈だ。なぜなら、自分の人生に対する意欲は、自分の手に自分の人生の行方が握られていることの実感が前提になければならないからだ。そう実感するためには、自分の頭で考えて自分の言葉で話すという、人間にとっての根本的な骨格がかたちづくられていなければならない。

「象徴的貧困」化が加速され、物事に対する判断が「中抜き」されていくなかでは、自分の頭で考えること自体が、したがって自分の言葉で世界に向かって話しかけていくこ

と自体が極めて困難になっている。その困難さを打開していく度合いにおいて、その意欲の度合いにおいて、上流一下流を指すのならともかく、働く意欲、学習意欲、消費意欲などをメルクマールとすること自体に前提そのものの偏向が露出している。なんのために働かなくてはならないかという問いの前では働く意欲も糞もないし、なんのために学習しなくてはならないかという問いは学習意欲そのものを問うているからだ。意欲を問題にするなら、その意欲が自分をどこへ連れだそうとしているかも問題にしなくてはならない。働くことが自分を幸せにしてくれなければ働く意欲は湧かないし、自分の人生をかたちづくっていくような学習でなければ学習意欲が起こってこないのは当然だろう。

武田徹は『Voice』（06. 3）で、「意欲」という点から『下流社会』に疑問を提出している。「意欲」を云々する以前に、意欲をもてないような環境で意欲をもてないように育てられるなかで、意欲についてどのように語るということのかということだ。

《階層分化はいまやそこまで熾烈を極めている。義務教育ですら援助が必要な家に育った子供の、その後の教育環境は推測に難しくなく、学べなかった結果、意欲をもってもそれが満たされる望みはほとんどない人生が用意されよう。だから意欲などもっていないかったふりをして、とりあえず手の届く範囲の安楽だけを追って日々をやり過ごしている——。つまり若い世代の多くは意欲を欠いて下流化しているのではなく、すでに意欲すらもてない下層に沈んでいるのではないか。》

最終章で描かれている《下流社会化を防ぐための処方箋》が結局のところ、《独特の「機会悪平等化」説》の《提案で終えてしまったところに下流社会化を本気で止めようとする意欲の欠如》を本書もまた、感じさせているとも批判する。《「意欲」に乏しいのは本書だけではない。すでに70万部を刷って『下流社会』がここまで話題になっているながらも、本気で下流化を堰き止めようとする動きが社会で起きているとは思えない。たとえば少子化対策で生めよ、育てよの大合唱が起きているが、きちんとした就学の機会やまともな雇用を用意できない社会で、子供の人口だけ増やそうとするのは、ニートやフリーターを増やすに等しい。》

「意欲」を欠如させているのは若者たちだけでなく、むしろ大人たちの「意欲」の欠如が下流社会を作り出しているのではないか。《そんな構図を『下流社会』のヒットは逆に浮き彫りにしたのではないか》と指摘する武田徹の言説から、「象徴的貧困」化状況下で誰もが「意欲」の欠如を免れえなくなっている姿が浮かび上がってくるとして、だがここでも、下流社会化を止めるために、《彼らを受け入れ、それまでの人生で受けられなかった教育の機会を与え、意欲と創造性を引き出す》ことが求められる。下流は否定的に受けとめられ、下流をなくすことが課題として語られるが、はたしてそうだろうか。下流社会に映しだされる社会全体の歪みについてもっと根本的に考えることのほうが先ではないか。オウムをぶっ壊しても、オウムに救いを求めて脱社会化する若者たちの動きを止めることはできなかったように。

2006年3月1日記